

地質情報展2009おかやま 瀬戸内海の生き物

谷本 照己¹⁾・湯浅 一郎¹⁾

1. はじめに

2009年9月4～6日, 岡山デジタルミュージアムで開催されました「地質情報展2009 in おかやま」では, 瀬戸内海の沿岸域に生息する生き物を展示しました. 参加要請があった時は, これまで研究所の一般公開で行っていたアマモや海岸で比較的簡単に捕獲できる貝, カニを1つの水槽で展示することを考えていました. 開催日が近づき送られてきた会場案内によれば, かなり大がかりで我々の展示スペースも結構広く, 水槽1つでは寂しいような気がしてきました.

情報展開催数日前, 呉市安浦町三津口湾でアマモ場を利用する魚介類の調査を実施する機会がありました. 調査では刺し網をアマモ場内に1日間設置し, タイやメバルなど色々な魚介類を捕獲することができました. そこで, それらの中で丈夫で展示しやすく, 手で触っても大丈夫な種を選んで情報展へ出展する

ことを考え, 出展まで我々の臨海実験場の水槽で飼育しました. 出展予定の魚介類の中にはドチザメという30cm程度の魚類も含まれており, これまでこのような生きた魚を展示した経験はなく, また開催場所が呉から離れた岡山であることなど, 色々な難点がありました, 今後の参考になりました.

2. 展示した生き物

展示した主な生き物は写真1に示すとおりです. オオヘビガイ, アカニシ, インダタミガイ, イボニシなどの貝類, ヒトデやナマコ, 小石に付着したミルやアオサなどの海藻, これらの他にアマモ株とアマモ種子などを用意しました. 岡山までの輸送は, 海水や生きた生物が含まれるので通常の宅配便などは使えないため, 部門でリースしている車で運ぶことにしました. 開催当日の朝, 臨海実験場で海水の入った20リットルポリ容器を10個あまり積み込んだ後, 水槽内の貝類を捕獲しました. しかし, 3トン水槽内のサメがなかなか捕獲できず追い回している内に海水が濁り, サメは捕獲できたもののヒトデやナマコは見えなくなり, たくさんいたはずのナマコは2個体, ヒトデは1個体しか捕獲できず, このことは後になってナマコとヒトデにとって災難となりました.

海水の入ったコンテナに魚介類を入れ, エアレーションをしながら3時間あまりで岡山に到着しました. コンテナ内のサメなどが生きていることを確認し, 展示物のセットを終えました(写真2). 写真2の机の上, 右側にアマモ株を植えた水槽, 左側の小さな水槽には展示交代用の生物を入れました. 下の床上に置いた70×90cm程度の浅型の水槽でドチザメなどの魚介類, 海藻を展示, 右のバットにアマモ種子を展示しました. 3日間の展示期間中, 生き物が死なないようにするため気を遣ったのは, エアレーションはもち



写真1 展示した生き物.

1) 産総研 地質情報研究部門

キーワード: 地質情報展, 瀬戸内海, 沿岸域, 魚介類, アマモ



写真2 瀬戸内海の生き物展示の様子。

ろんのこと苦労したのは水温でした。会場内はエアコンがきいているとはいえ彼らが住んでいた海と比べれば温度は高く、夜間ではエアコンは停止することでした。そこで、各水槽に保冷剤を入れました。写真2の水槽内に白く見えるのが保冷剤です。とはいえ、凍らせて用意した保冷剤は開催初日でなくなり、後は3時間おき位に近くのコンビニからビニール袋詰めの水を仕入れ、水槽内の水温を下げました。

3. 子供たちと生き物のふれあい

最近では、子供たちは海へあまり行かなくなったように感じます。海が身近にあっても、夏、泳ぐのはプールで、海は危険なので遊びに行かないように言われている子供もいるのではないのでしょうか。都市部では、海辺に工場が建ち並び、私有地のため海辺まで行くことすらできない場所もあります。そこで、子供たちに海、そこに生息している生き物に慣れ親しんでもらうことを目的に、展示している生き物に積極的に触ってもらって愛着を持ってもらうことにしました。

初日では、地元の小学生がグループ毎にやってきました。最初、水槽内に何が入っているのか探り、何がいるかわかった後の対応は様々です。最近では、生き物に触れることができる水族館もあるようで、第1パターンとして、そのような経験のある子は、何ら抵抗もなく触り、つかみます。次に、最初は何もしないが、こちらから触ってもいいですよと言うと、第2パターン

として、しきりに触りだす子、第3に最後まで怖くて触れない子でした。第3パターンの子は3日間を通して2、3人でしたが、初日では第1パターンの子が多く、どのグループの小学生も次々とサメを追い、つかみ、触り、ナマコは触るというよりつかんで持ち上げられ、大きい方のナマコは伸びきったゴムのようにだらりと垂れ下がり、死ぬ寸前のように思われました。このナマコは交代用の小さな水槽へ避難させることとし、2日目以降では、ナマコとヒトデ各1個体、サメ2匹が子供たちの主な相手となりました。サメは狭いながらも泳いで逃げることもできますが、ナマコとヒトデは各1個体しかいないことと自ら逃げるのができないため、次から次へと触られ続け、ずいぶん弱ってきました。この頃から、積極的に触ってもらおうという当初の目的より、“もう許してやって”という思いの方が強くなりました。3日目、ナマコは緊張が続いたためかボールのように丸くかたまつたままとなり、ヒトデは“もみじ”のような模様があって腕の周りにとげがあるのでトゲモミジと呼ばれる種でしたが、触られている内に取れて、最後にはとげがすっかり無くなっていました。

4. おわりに

ナマコとヒトデにはずいぶんかわいそうな思いをさせましたが、子供たちがこれほど興味を持つとは思いませんでした。情報展では、お母さん方含め“サメ肌”を実感していただき、アマモは海中で花を咲かせて種を作り、海流により種を拡散させて自分たちの生息域を広げていることに興味を持っていただきました。そして、子供たちは海の生き物に触ることにより、実際の海に遊びに行っているかのように喜んでもらえることがわかりました。同じ子供さんが日を変えて水槽を見に来ているのに気がつきました。海、瀬戸内海の生物、環境に興味を持ってくれることを期待します。私たちの研究グループは2010年4月から東広島に移転し、今後一般公開の際にどのような展示をするか迷っていたのですが、今回の情報展に参加したことで、大変参考になりました。

TANIMOTO Terumi and YUASA Ichiro (2010) : Fishes and Megalobenthos in the Seto Inland Sea in Geoscience Exhibition in Okayama 2009.

<受付：2010年3月10日>